

源空光明はなたしめ

門徒につねにみせしめき

賢哲愚夫もえらばれず

豪貴鄙賤もへだてなし

(『高僧和讃』 聖典四九九頁)

本願が開く出あい

第17組 本照寺住職

桂井 智善

Text by Tomoyoshi Katsurai

先般開催された冬季アジア札幌大会の開会式で、道内のアイヌ民族が「自然と共に生きるチカラ」をテーマに古式舞踊を披露した。国際スポーツ大会では初めての試みであるという。アイヌ民族には、同化政策、単一民族発言等、その存在すら否定されるという苦難の歴史がある。人間としての尊厳回復を求める戦いの歩みの中で、広く国内外に日本における先住民、異文化の存在が発信された意義は大きい。一方でその苦悩の日々は私の到底計り知るところではない。

1993（平成 5）年、地元帯広別院が開教百年を迎えた。その折り、記念講演をお願いした平野修先生から、大谷派の開拓開教における非違の歴史、先住民差別について継続して学んでほしいとの要請があった。別院と第一七組をあげての試行錯誤の学びがはじまったが、一人では担いきれない重い課題を、組や教区の有縁の人々とそれを共有することで継続した学びとなった。だが、それは自らの闇（差別性・無関心・鈍感さ）を知らされることでもあった。

法然上人は『選択本願念仏集』本願章の中で、本願の因は平等の慈悲に由来するとし、その言行、姿を通して人々を感化せられた。宗祖は、法然と人々の交わりの様子を「源空光明はなたしめ 門徒につねにみせしめき 賢哲愚夫もえらばれず 豪貴鄙賤もへだてなし」とうたっている。

法然のもとを訪ねた者は、才覚の有無、貧富・貴賤の別なく、皆がその光明に照らされる。それは上人の姿に平等にして無差別なる本願のはたらきを見出し、他と比べる必要のないありのままの自分自身を受け入れ、それによって生きる意欲を回復したのだろう。

「智慧第一」、「持戒第一」と称せられながらも、自らの救われざる身を通して本願に出会い、「十悪の法然、愚痴の法然」として、悪人・愚者たる凡夫の立場を貫いた師を宗祖は弥陀の化身とみていかれた。

宗祖もまた「愚禿」と名のり、生涯を通して、仏の光明に照らし出される本当の自分の姿を問題にされた。「よしあしの文字をもしらぬひとはみな まことのころなりけるを 善悪の字しりがおは おおそらごとのかたちなり」。越後や関東のいなかの人々との出会いの中で、我が身がいかに小賢しく、虚仮不実の身であることを悲歎された。

平野修先生は、人間の生き方における自明の事実、「愚より賢、悪より善、劣より優、という賢善精進の在り方」が、他との間に深い溝、孤立や離反をつくる因となり、それによって限りなく地獄・餓鬼・畜生の世界が作り続けられていること。そして本願との出会いによって、虚仮不実の身、闇を抱える身であることを知らされ続け、そこに得られた傷み悲しみ（慚愧心）こそが「同朋」、「同行」の基礎だと教えてくださった。

自ら真宗門徒となられたあるアイヌの方の、「自分は、浄土真宗に出会うことによって、何の気後れもなく堂々とアイヌ民族文化を大切にし、伝統行事を行っていけるようになった」という言葉を聞き、標記の和讃にうたわれた法然とまみえた人々の感動は、歴史上の過去の出来事ではないことを知らされた。同時に、自分はその絶えることのない本願の世界に本当に出遇っているのかと問われている気がする。

2年後の2019年、教団の存亡をかけ進められた北海道開拓・開教が始まってから150年を迎える。怒りと深い悲しみを堪えて「共に生きる」ことを願われるアイヌの人々の声を受け止め、「同朋」としての出会い直しをすることが、懸命に念仏の法灯を繋いでくださった先人のご労苦に応えることだと考えている。